「文学部らしさ」とは？

史学科三年 ❖ 原賢二

▲ゲーム後の表彰風景

今回が二度目となる文学部単独開催によるオリキャンは、去る四月二十三日、二十四日、高田郡吉田町の吉田少年自然の家で行われた。

顔合わせから、本番までの一週間に行う衣装づくりに始まり、当日は、文学部企画、野外炊飯、キャンドル・サービス、二日目の屋外スポーツ大会と、多くの企画を行った。

このうちのキャンドル・サービスは、本来ならばキャンプ・ファイヤーを行うはずだったが、当日の朝から降り出した雨が、夕方になっても止まず、急遽変更となった。

さて、今年度のオリキャンで新たに行ったのは、文学部企画である。地元の吉田町歴史民族資料館の館長である秋田隆幸氏に、「戦国武将　毛利氏と広島」と題して講演をしていただいた。

今回のオリキャンを企画するに当たり、我々実行委員会の側と学生厚生委員の間で行われた話し合いのなかで、教官側からは、「遊びだけでなく、なにか学部の特色を生かした文学部らしい企画を取り入れてもらえないか」という要望が出された。「文学部らしさ」とはなにか？

ともすれば、学部に関するクイズ等に逃げてしまいがちな学生と、アカデミックな要素を前面に押し出そうとする教官との話し合いは平行線をたどり、一時は、教官企画の時間を作り、全面的に任せてしまおうとまで考えた。

そんな時、ある教官から、「吉田少年自然の家は毛利元就の本拠地　郡山城の麓にあり、周囲に史跡も残っているので、今回は史学科に関するガイダンスを行っては」という意見が出され、これに教官、学生の双方が納得した。当初は、講演のあとで、付近の史跡巡りをすることも企画していたが、時間の都合上省略せざるを得なかったのは残念だった。

このようにして行われた文学部企画だったが、新入生にとっては、講演という受動的な形式は、あまり満足のいくものではなかったようだ。

昨年の六月からの十か月間、我々にはいつでも「文学部らしさとは？」という命題がついてきた。結局我々の出した答えは満足できるものではなかったが、新入生の一人一人に是非この命題に対する答えを出してもらいたい。それをもとに、これからの四年間、文学部という集団の中で自分がすべきことをそれぞれに考えてもらえれば幸いである。

今年のオリキャンは終わったが、教官のなかには、依然としてこの行事に対して否定的見解を持つ人が多く、新入生の不参加者も一割を超える。これらの人たちが参加する気になるようなものを作ることが、これからの課題である。

いつの日か、参加率一〇〇％の、誰もが楽しめるオリキャンが行われる日が来ることを願って終わりとする。